TCVV 白書 第 16 号 通巻 19 号 2013 年 8 月 10 日発行（不定期発行） ISSN 2185-9043

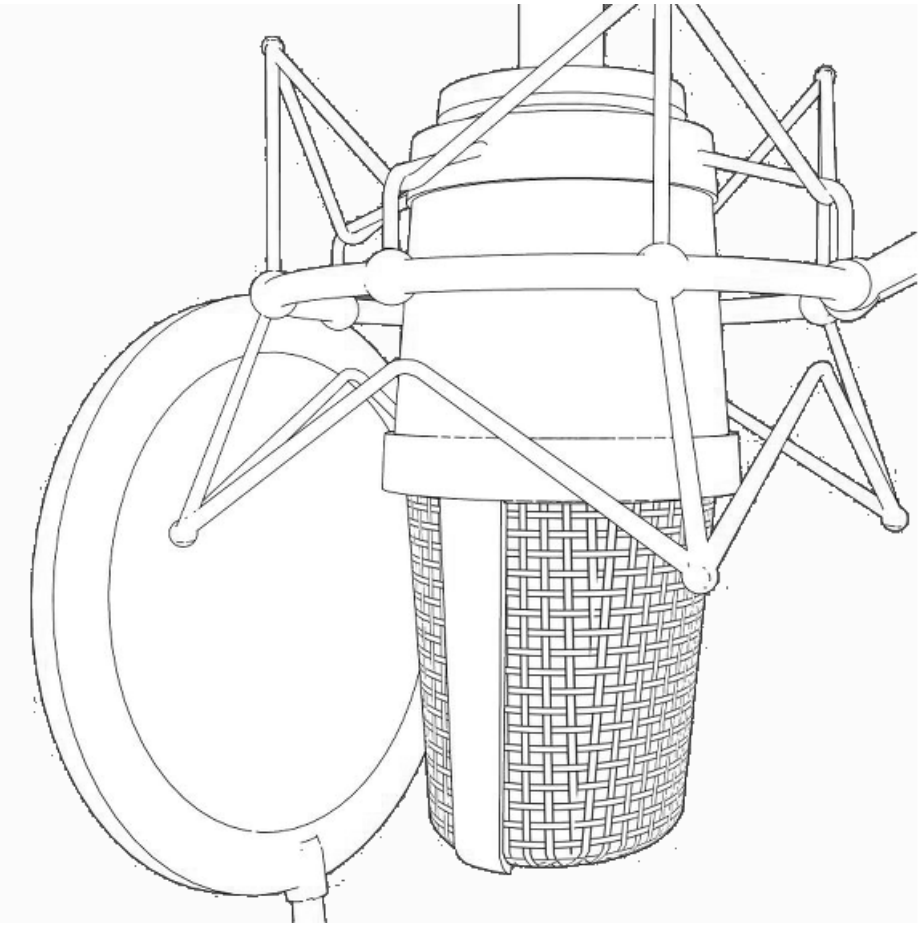
秘密結社
声優はVisualに出るな！会議
TCVV
http://www.tcvv.org/

TCVV白書

特設記事:: ホリエモン発言を考える

16

The TCVV Whitepaper 2 0 1 3 N O . 16



声優はVisualに出るな！宣言 Ver1.11

声優はVisualに出るな会議 決議第00000号

声優は映画俳優・舞台俳優に比べ声だけで勝負をするという過酷な生業である。
映画・舞台俳優は身振り手振りが付加されるので視覚に訴えることが効く。
が、声優はそうは行かない。だからこそ高度な演技力が必要とされるのではないだろうか。
現在、第四次声優ブームと言われているそうだが、何か違和感を感じずにはいられない。
最近の「声優」と呼ばれる人々はVisual、その他のメディアに頼りすぎ・出過ぎではないだろうか？
今やマーケティングでメディアを十分に活用すれば、そこら辺のお姉ちゃんでさえもCDをあっという間に売ってしまう。この状況を「沈黙のミリオンセラー」[1]とは良く言ったものである。
「声優」自体が今やメディア戦略によって商品になってしまったと思う。
この戦略は聴衆を気がつかない間に購買者に変えてしまう巧みなシステムだと考える。
しかし、このシステムは本来の価値。つまり「声のプロフェッショナル」としての声優を正当に評価していないものであると言える。

舞台俳優の中には決してVisualに耐えられる人ばかりではない。
が、そのような人が舞台に立てるのは、人を引き付ける演技力を持っているためであると考える。
一方、声優の質は低下している。これは最近のアニメーションは高度な演技力を必要としないものが多くなっているからといえよう。そうなれば声優の質が低下するのは至極当然のことである。[2]
従って、高度な演技を必要とする作品では声優の能力の限界が露呈してしまう。
例えば、劇場版新世紀エヴァンゲリオンの最後の最後はアスカのほんの一言で終わる。[3]
しかし、この台詞は始めに用意してあったものとは違うものであったようだ。
本来は「あんたばか？」であったようだった。が、声優の力量不足のため、結局「気持ち悪い。」へと変更を余儀なくされた。
完全に声優が役に負けてしまっていたのである。
結果、作品は中途半端に仕上がってしまい損害を被ったのは我々聴衆者である。

声優が新境地を求めるのもいい。しかし、声優も役者であるのだからまず足場を固めてから進出するのが筋と考える。
我々は、健全な日本アニメ・マンガの質を守るため、ここに「声優はVisualに出るな！」を宣言する。

[1] 誰もが知っている訳でもないのに100万枚以上売ったレコード・CDのこと。一昔前は100万枚といったら大部分の人がその曲を知っていた。
[2] 劇場版Evangelionのパンフレット（春、夏ともに）にて清川元夢氏はプロ意識なき声優への批判とも解釈できる発言をしている。これは非常に勇気ある発言と言える。（普通はこういう事は映画のパンフでは言わないであろう。）
[3] 実はEvangelionはヲタク（庵野氏）によるヲタク批判であったことはあまり報じられていない。ヲタクの皆様はそのメッセージを受け取れなかったとのこと。（レイとシンジが列車に乗っていて会話をするあのシーンが批判部分とされている）

目 次

巻頭言 **5**

1 追悼 RAMS **6**

2 第 17 回 TCVV 短期アニタレ観測調査 **8**
2.1 TCVV 短観概要 8
2.2 調査期間 8
2.3 集計 8
2.4 傾向分析 10
2.5 際立つ状況 10
2.6 気になる動き 11
2.7 定点観測 11
2.8 新人動向 12

3 『ホリエモン発言を考える』 **13**
3.1 ホリエモン発言 13
3.2 声優は構成部品の 1 つであるという考え方 13

4 専門雑誌における掲載率 Vol.12 **14**
4.1 目的 14
4.2 解析方法 14
4.3 結果 14
4.4 データ考察 15

5 声優システム論（10） **16**

6 TCVV フォーラム **19**
6.1 Chairman's free talk-議長放談 19
6.2 From member's voice 20
6.3 From reader's voice-読者の声- 21

編集後記 **22**

巻頭言

声優は Visual に出るな!会議 議長 萱沼真一

『アニメコンテンツ・コンビナート』

本誌前号にて角川の地産地消の話をした。センセーショナル感を出すために地産地消としたが正確には角川自身が消費している訳ではない。
自社が所有している原作をアニメ化する際に自前声優で加工生産していると見立てた方がより正確である。
出版社が系列会社として声優事務所を設立して『お抱え声優』を擁することで、あたかもコンビナートを形成して一体生産化しているように見えることから、『アニメコンテンツ・コンビナート』と形容した方が良さそうだ。
声優養成するところは AMG(アミューズメントメディア総合学院) が請け負っており一大コンビナートの様相を呈している。最早、工業的に生産されていると言ってもよい。

コンビナートが絶対悪とは思っていない。ビジネスのやり方としては間違っていないと思う。
が、しかし原作がコンビナート内の声優事務所に直に出荷されるのだから他の事務所より有利に働くことで競争が発生せず、品質向上されない懸念がある。下手声優の巣窟になりそうなのも事実である。実際、プロダクション・エースには聞くに耐えない者もいる。
工業生産化されている割には品質が非常に悪い。ISO9000 を取得しろと言いたいレヴェルである。

また親会社が出版社となると原作ファンの方々が沢山いるかと思う。
折角、好きな作品がドラマ CD になったりアニメ化したのにコンビナートで生産された結果、原作改変やイメージと違う声だったり聞くに耐えないものになったりしたら、そのダメージは計り知れない。
さらには抱え過ぎた声優の稼働率を上げるため不毛なコンテンツが乱発するという事態にもなる。
コンビナート化は角川だけではない。
ミュージックレインも角川ほど明らさまではないがコンビナートの要素はある。
原作という原料を製造する前工程は無いものの後工程 (音楽制作、アニメ制作) があるので原作を作る前工程さえあれば独立したコンビナートが出来あがる。

本年、角川 GHD は 6 月の株主総会の承認を得て 10 月には 9 社が合併した KADOKAWA という企業が発足する。
KADOKAWA が音楽出版社部門を作れば、それこそプロダクション・エースが声優ユニットを作って売り出すことにもなろう。
そうすればアイドル系事務所と声優系事務所のユニット乱立という不毛なものも発生し最早、何が何だから分らないカオス空間へと導びかれる。

声優という言葉が無い時代から考えればシステマティックになり声優の工業生産化が進んで大量生産と一定品質が得られるようになった。
工業生産化には反対していないし、一定品質が得られることには大いに賛成だ。
だがしかし、不良品だけは生産して欲しくはない。我々は、ただ、それだけを願うのみだ。
アニメコンテンツ・コンビナートには安全標語の代わりに『作品が主であり役者は従』という標語を掲げて欲しい。

The council of 'Voice actors should not appear in Visual'

追悼記事

1　追悼 RAMS

TCVV 議長

TCVV が長年ウォッチしてきた声優事務所のラムズが 2013 年 6 月 7 日に東京地方裁判所から破産手続開始の決定を受けた。
2013 月 3 月 31 日に事務所を閉鎖。活動を停止し所属していた声優が一斉に退所したのでどうなった思っていたが最終的にはこのような結果となった。
帝国データバンクによると負債額は 2 億 6000 万円。
一説によると業務縮小するに当たり新宿の一等地に構えた事務所を移設しようした際の原状回復費用が捻出できずに倒産したという。

TCVV にとってラムズは敵であった。ラムズのやり方は気に喰わなかったので潰れたことに対しては正直に言えばメシウマである。
その一方で現代における声優事情をウォッチする対象サンプルとして注視していた。
今後、ラムズに関しては積極的に言及することは無いと思う。最期に~~恨み言~~追悼という形でまとめてみたい。

ラムズが本格的に声優事務所として活動した初期 (2000 年頃だったと思う)、この頃から野川さくらがアニメに出まくる時代があり『また、野さくか!』という時代が続いた。その頃からアンチ野川さくらが増えた。看板声優となり最後まで看板を背負っていた。
そう言えば、当時 TCVV はラムズの WEB ページの更新状況を確認するためにアンテナシステムに URI を追加したところラムズ担当者より『無断リンクはするな!』という抗議メイルがきた。
インターネットの常識からリンクは自由。そんことすら知らない阿呆な事務所だなと当時から思っていた。その後、公式ページがリニューアルされてからはリンクはご自由にとなっていたが。
まぁ、今となっては良い思い出であり、その時来たメイルは記念として大切に取っておきたいと思う。

ラムズはギャラ制ではなく月給制だった。社長の鹿志村氏によれば、所属声優が当った時に権利関係に関して後から文句を言わせないようにするためだった。
戦略としては考えていたが、そのことがコスト増の遠因となっていたと考える。
アイドルバスツアーの声優版を最初にやったのはラムズではないかと思う。
また、映像製作会社が本業だったこともあり、ラムズが製作したり協力したアニメも多くあった。
自社製作作品に自社声優を使うという『地産地消』を早い段階からやってきた。
きちんととしたものを作るのなら良かったが構想が練られていない所為で原作レイプになった『マジカノ』に関しては絶対に許せない。

小さな事務所だったからこそ出来た『先進的なこと』だと思うが、これが後になって尾を引いたと考える。
その後、拡大路線をひた走り声優養成 (RAMS Professional Education) も手がけるようになって来た。
しかし、業績が上るに連れ綻びも出てきたようだ。場当たり的な運営が目立つようになった。
例えば宮崎羽衣、斉藤桃子、井ノ上奈々、庄司裕衣の 4 人で結成したユニット『クローバ』。
最初は活発に活動していたが後半になって活動が鈍くなって来たころ、構成メンバが事務所を退社しユニット自体が維持できなくなった。そして、何の連絡のないままユニット自体が自然消滅した。

クローバのファンクラブもあったのだがユニットの消滅と共に無くなった。
そのファンクラブであるが会報を年 4 回出すと言っておきながら 1 度の発行もなかったという。
しかもクローバがグダグタしてるその間にも酒井香奈子、井ノ上奈々のユニットである『ナナカナ』が結成されたが鳴かず飛ばず状態。酒井香奈子が退社することでまたも有耶無耶のまま消滅。
今、思えばこの頃、既にラムズはおかしくなっていたのだと思う。
宮崎羽衣によれば 2009 年頃からマネージャを付けてもらえなかったようだ。その時、既にマネージャも雇えないくらいに財政的に火の車であったことは窺い知れる。
浅野真澄が 2006 年の初頭、ラジオ特番にて『ラムズがこれ以上大きくなりませんように』と祈っていたがこれが成就したのかは文字通り神のみぞ知る。
逆に浅野真澄は本業の声優以外に絵本作家としての文筆業も軌道に乗りさらには本業も順調で大勝利を納めているのは皮肉だ。
　ラムズのピークは 2006 年だったと思う。ちょうど、新作アニメ製作数もピークであった。
その後の 2008 年のリーマンショックにて日本全体が景気低迷に陥ってことでラムズのビジネスモデルが崩壊して倒産したのだろう。
歴史に『たられば』は無いが、もしリーマンショックが無ければラムズは倒産しなかったかも知れない。とは言え、もうラムズは存在しない。TCVV はラムズという事務所のやって来たことを忘れない。

合掌

調査記事

2　第 17 回 TCVV 短期アニタレ観測調査

TCVV 情報管理部 調査課 短観担当

2.1　TCVV 短観概要

経済指標を示す「日銀短観（日本銀行短期経済観測調査)」のようにある期間に区切りアニメタレントの出演数を調査することにより現状の動向を分析する。
なお、データは「しょぼいカレンダー[4]」から TCVV の算出基準[5]により機械的に抽出したものである。

集計方法は新規出演数を 1Q 毎に集計し合算した後、4 で除することで 1Q 当たりの新規出演数の平均値を算出する。この値を「短期的な活性度（単純活性度)』と定義する。

ただし、人間は忘却をする性質があるので『単純活性度』だけでは感覚に合致しないと考える。最近の出演した方がより印象が深い。そこで人間の感覚を取り入れるため過去を割り引いて考えた『感覚活性度』も同時に算出する。
具体的な算出方法は 4Q 前は出演数に 0.25 を、同様に 3Q 前は 0.5、2Q 前は 0.75 を乗ずることで重み付けし人間の感覚により近い活性度を算出する。
活性度が 1.00 以上ということはクオータ毎に平均して新規 1 本出ていることになりコンスタントに新規出演していると言える。言い変えれば『常に新しい状態』である。

順位に関しては感覚活性度を優先とし、感覚活性度が同値の場合は単純活性度で比較した。また調査結果については誌面を圧迫するため男女とも上位 20 名までの掲載とした。
(標本数 男性 70 名、女性 159 名)

2.2　調査期間

西暦 2012 年 10 月～2013 年 7 月

本調査は十分な調査をしていますが内容を保証するものではありません。

2.3　集計

2.3.1　女性編

順位	氏名	2012/4Q	2013/1Q	2013/2Q	2012/3Q	単純活性度	感覚活性度
1	日笠陽子	2	4	8	5	4.75	3.38
2	茅野愛衣	4	7	4	5	5.00	3.13
3	沢城みゆき	6	2	6	4	4.50	2.75
4	花澤香奈	7	3	3	5	4.50	2.63

[4]http://cal.syoboi.jp/
[5]無料放送の TVA レギュラ出演のみで単発出演は除く

順位	氏名	2012/4Q	2013/1Q	2013/2Q	2013/3Q	単純活性度	感覚活性度
5	井口裕香	4	4	2	6	4.00	2.63
6	阿澄佳奈	5	3	4	4	4.00	2.44
7	釘宮理恵	5	3	6	2	4.00	2.31
8	内山夕実	4	1	5	4	3.50	2.31
9	東山奈央	0	4	3	5	3.00	2.31
10	喜多村英里	3	4	3	4	3.50	2.25
11	堀江由衣	7	1	4	3	3.75	2.06
12	伊藤静	4	1	3	4	3.00	1.94
13	佐藤利奈	0	1	3	5	2.25	1.94
14	加藤英美里	2	2	4	3	2.75	1.88
15	斎藤千和	0	2	2	5	2.25	1.88
15	佐倉綾音	0	2	2	5	2.25	1.88
17	戸松遥	3	2	4	2	2.75	1.69
18	大原さやか	3	1	2	4	2.50	1.69
18	遠藤綾	2	1	5	2	2.50	1.69
18	内田真礼	1	4	2	3	2.50	1.69
21	能登麻美子	2	1	1	5	2.25	1.69

2.3.2 男性編

順位	氏名	2012/4Q	2013/1Q	2013/2Q	2013/3Q	単純活性度	感覚活性度
1	浪川大輔	6	1	6	6	4.75	3.13
2	諏訪部順一	5	2	5	4	4.00	2.50
3	福山潤	5	1	5	4	3.75	2.38
4	櫻井孝宏	5	1	2	6	3.50	2.31
5	小野大輔	2	3	6	2	3.25	2.13
6	梶裕貴	6	1	3	4	3.50	2.06
7	中村悠一	5	2	5	2	3.50	2.00
8	逢坂良太	2	1	4	4	2.75	2.00
9	岡本信彦	4	2	5	2	3.25	1.94
10	神谷浩史	3	2	4	3	3.00	1.94
11	下野紘	0	5	4	2	2.75	1.88
12	杉田智和	7	1	4	2	3.50	1.81
13	柿原徹也	0	3	2	4	2.24	1.75
14	宮野真守	2	1	5	2	2.50	1.69
15	小野友樹	4	1	4	2	2.75	1.63
16	細谷佳正	3	1	3	3	2.50	1.63
17	鳥海浩輔	3	1	3	3	2.00	1.63
18	寺島拓篤	2	2	2	3	2.25	1.50
18	前野智昭	2	1	4	2	2.25	1.50
20	松岡禎丞	2	0	2	4	2.00	1.50

2.4　傾向分析

女性についてはこれまでと違う傾向を示しているのが興味深い。
ここ数年 1 位、2 位を花澤香奈か沢城みゆきが独占して来たが、今回の調査では 1 位が日笠陽子、2 位が茅野愛衣となり、明け渡した形となった。
特に茅野については、デビューから急激に伸びており「よく聞く声」となった。
1 位の日笠も非常に主演数が多い。また前回調査では 3 位だった堀江が 10 位と定位置に収まっている。

前回調査で注視して来た新人については予想通り大きな伸びを見せている。
特に内山夕実、東山奈央が急激に伸ばしており、序で佐倉綾音が来ている。またランク外ではあるが『たまこまーけっと』で脚光を浴びた洲崎綾が大きく伸びている一方で、前回 20 位内に入っていた高森奈津美は大きく順位を落してしまった。

男性では女性向作品数の増加を受けて全体的に数値が大きくなっている。
順位の固定傾向は少ないものの 10 位以内は常に同じ人間がいる状況である。
そのような中で福山潤、櫻井孝宏がほぼ毎回同じ位置を保っているのが特徴的である。また前回 1 位の杉田が 11 位、石田彰が 10 位から 24 位と大幅に下落している。

大手出版社が母体となっている事務所や事務所が主導で作品を作っている場合には、その所属声優には一定の割合で仕事が確保されている状況が非常に強い。例を上げると『響』のミルキーホームズ組やプロダクション・エースの野水伊織など。
同様にキングレコード『お抱えの声優』(小松未可子、喜多村英里、上坂すみれ、堀江由衣、水樹奈々) は同社作品に自動的にキャスティングされる傾向にある。
特に堀江由衣・水樹奈々は毎クール、同社作品に出演していると言っても良い。

2.5　際立つ状況

2.5.1　茅野愛衣

前回調査が 10 位だったのが今回 2 位。2010 年のデビューから僅か 3 年で 3 位以内に入るようになった。非常に早いペースで数々の主役級をこなしている。が、ペースが早すぎて、どんなアニメにでも出ているような感じを受けやや食傷気味。

2.5.2　東山奈央

前回調査、93 位だったのが 9 位と大躍進している。急激な伸びは反動で急落する傾向にあるのでこの勢いが持続するのか今後を要観測である。

2.5.3　逢坂良太

急激に伸びを見せて、主演数も大幅に上昇している茅野愛衣と同じ傾向になるものと予想している。

2.5.4　杉田智和

前回 1 位だったのが急落して 11 位。男性声優特有の不安定さを特徴付けている。

2.5.5　福山潤

変動の多い男性声優の中で安定した位置を保っているのが特徴的である。

2.6　気になる動き

1. 佐倉綾音

85 位に 16 位以内に一気に上昇して来たが声に特徴が少なく今後が微妙と思える。

2. 洲崎綾

表には掲載していないが『たまこまーけっと』でヒロイン役を務めてから頭角を現して一気に上昇して来た。

3. 下野紘

久々に 20 位以内に入って来たが変動が激しく安定性が無いのが特徴的。

2.7　定点観測

1. 能登麻美子 (7 位→ 20 位)

常に 10 位以内で安定していたが今回調査では 20 位と大きく後退。
一つの時代の終わりなのか動向を注目したい。

2. 堀江由衣 (5 位→ 10 位)

前回調査では 5 位であったが、今回は 10 位と定位置に戻った。
これまでの調査から前回がイレギュラと言える。

3. 田村ゆかり (63 位→ 35 位)

前回調査同様に順位が奮っていない。出演数は少ないが依然として存在感は大きい。

4. 平野綾 (79 位→ 52 位)

事務所移籍による効果か大幅に改善したようだが全盛期の勢いは全くない。

5. スフィア（高垣彩陽、豊崎愛生、戸松遥、寿美菜子）

戸松は前回調査とほぼ同じ、毎回 20 位以内と高安定。
逆に豊崎、寿はランクダウン。
高垣は前回調査より大幅に上昇しているものの調査毎に非常にブレ幅が大きい。

6.StylipS（能登有沙、松永真穂）

4 月になりメンバーの一部が入れ換えが発生した。ゆいかおり部分以外については殆ど変化せず。

7. 野水伊織 (63 位→ 75 位)

前回調査より順位を落している。各クール必ず 1 作品には出ているものの、その殆どが角川作品であり今回調査でも全て角川作品にしか出ておらず前回調査で予想した通りの結果になった。
出版社系プロダクションのビジネスモデルを象徴していると言える。

8. 石田彰 (10 位→ 24 位)

常に 10 位前後で指標としていたが今回調査にて 24 位となってしまった。今回、新たに調査を追加した人間が 20 位以内に 4 名入っているが、それを考慮しおいても大幅にダウンしている。

2.8 新人動向

順位	氏名	2012/4Q	2013/1Q	2013/2Q	2013/3Q	単純活性度	感覚活性度
38	小倉唯	1	1	2	3	1.75	1.31
38	赤崎千夏	1	1	2	3	1.75	1.31
46	小松未可子	1	0	3	2	1.50	1.13
47	瀬戸麻沙美	2	2	1	2	1.75	1.06
56	上坂すみれ	2	1	1	2	0.94	1.50
61	大久保瑠美	1	0	3	1	1.25	0.88
61	浅倉杏美	1	0	3	1	1.25	0.88
65	石原夏織	2	0	1	2	1.25	0.81
73	五十嵐裕美	0	2	1	1	1.00	0.69
73	山本希望	0	2	1	1	1.00	0.69
77	木戸衣吹	1	1	1	1	1.00	0.63
84	沼倉愛美	1	2	0	1	1.00	0.56
84	大橋彩香	1	2	0	1	1.00	0.56
94	大坪由佳	0	2	1	0	0.75	0.44
97	小岩井ことり	0	0	1	1	0.50	0.44
110	中上育実	1	0	0	1	0.50	0.31
120	三澤紗千香	0	1	1	0	0.50	0.31
120	水瀬いのり	0	0	0	1	0.25	0.25
127	渕上舞	1	1	0	0	0.25	0.19

前回予想した通り、ここ 3 年でデビューした新人が前回調査より概ね上昇している。
茅野を筆頭として内山と東山が 10 位以内、20 位以内に佐倉、内田と躍進している。
赤崎が実力を発揮して大きく伸びているものの石原、大坪が下落してしまっている。
小松についてはスタチャの後押しがあって伸びている。
上坂すみれは前回より伸びているもののメディア露出度の多い割に伸びは無く依然として話題先行型となっている。
さらに三澤紗千香については前回調査同様に伸びが無く不安な面がある。

特設記事

3 『ホリエモン発言を考える』

TCVV 議長

3.1 ホリエモン発言

『声優って実際そんなにスキルいるんかえ？って身も蓋もない話もあるし。』
堀江貴文氏 (以下、以下ホリエモン) が Twitter でつぶやいたの声優に対するこの発言が一時期、話題騒然となり、氏は現役の声優達やファンから多くの非難を浴びた。
しかし、氏の発言はアニオタではない通常の人から見た素直な感想だと考える。
当方、ホリエモン自体好きではなく寧ろ嫌いな部類である。が、ホリエモン発言はピンポイトで痛いところ突いていると思った。事実アイドル声優の類は一般人から見れば演技が下手な割にチャラチャラしていたり見える。現役の声優はホリエモンに対して猛烈な勢い反論を展開したわけだが、ホリエモンにこれを言わせたのは当の声優業界ではないか。
異様な受注形態や声優のアイドル活動など是認・黙認しておいて声優はスキルが要らないかのように見せた戦犯こそ今の声優業界にある。それを棚に上げてホリエモン発言に文句を言う資格があるのか。いや無い。ぶっちゃけ文句を言う相手を間違えている。

3.2 声優は構成部品の 1 つであるという考え方

声優グランプリ web l 声優道[6]にて永井一郎氏が興味深い発言をしている。
『20 年ぐらい前の新人声優は、下手だけどおもしろい連中がいた。今の時代は、優秀で才能がある人が多い。けれども個性がないのです。誰がどの声なのか、分かりにくい。』
確かに随分と前から下手なのはいなくなっていると感じる。平均水準が上って極端に下手なのはいない。その一方、没個性的になってしまっているのは事実だろう。
声優専門学校が出来たり永井氏が若かった頃に比べて環境の整備は進んでいると思っている。それにより品質が安定して粗悪品が激減している。それが『平均化』を招き、ひいては氏の言う没個性となってるのだろう。
没個性化を食いとめるためには差別化が必要と考えた業界はアイドル化などを進めて来た。
ホリエモン発言は、恐らくは全体水準上昇により平均点以上出せない声優とアイドル的な活動に対して一般人目線から自然と出たものだろうと思う。
永井氏は下手でも味がある方が良いと言いたいのだろうがそうは言っても下手なのは困る。
例えば、大坪由佳。『ゆるゆり』にて彼女の声を初めて聞いた時、そんなに違和感は感じなかった。しかし、ビビットレット・オペレーションにて彼女の声を聞いた時に凄い違和感、簡単に言えば下手さを感じた。
性能を発揮する場所が限られてしまうんだと感じた。役どころにより向き不向きというのはあるが、あまりにも極端である。本来ならば、こういう事態は避けてもらいたい。
これが出来ないのであれば声優はアニメを構成する部品というドライな考え方を基本として場合による使い分けを徹底して下手さが前面に出ないようにしてもらいたい。

[6] http://seigura.com/senior/road/road_detail/tabid/73/pdid/nagai01/Default.aspx

調査記事

4　専門雑誌における掲載率 Vol.12

TCVV 情報管理部 調査課 掲載率担当

4.1　目的

本寄稿は TCVV 宣言にある『「声優」と呼ばれる人々は VISUAL、その他のメディアに頼りすぎ・出過ぎではないだろうか？』という、TCVV 本来の目的に戻り TCVV 情報管理部調査課が独自（独断と偏見 ???）に解析した結果である。

では実際にどのくらいのメディア出現率なのだろうか？

本調査では主にメジャー声優雑誌「声優グランプリ（(株）主婦の友社発行)」を元にグラビアの面積にて評価する。

4.2　解析方法

以下の条件にてページに対するグラビア率を算出し、個人毎＆事務所毎にビジュアルに出ている率を算出している。

個人出現率：純カラーグラビアページ率のなかで、個人ごとに相当する占有率。複数人で掲載されている場合には単純に人数で除算する。

$$Cp3 = \frac{\text{個人でのグラビアページ数}}{\text{グラビアのみの総ページ数}} \times 100$$

事務所別出現率：純カラーグラビアページ率の中で、所属事務所別の占有率。複数事務所で掲載されている場合には事務所数で除算する。

$$Cpj = \text{事務所別出現率} = \frac{\text{所属事務所別グラビアのみのページ}}{\text{グラビアのみの総ページ数}} \times 100$$

4.3　結果

2013 年、1 月から 6 月にかけての上半期各号の上位 5 名をピックアップした表を以下に示す。

	1 月号	38.55p	2 月号	34.98p	3 月号	34.48p	4 月号	33.5p	5 月号	45.1p	6 月号	31.45p
1	水樹奈々	22.59%	井口裕香	25.73%	悠木碧	26.1%	梶裕貴	25.37%	竹達彩奈	21.06%	日笠陽子	22.26%
2	内田真礼	11.67%	竹達彩奈	18.58%	上坂すみれ	10.15%	羽田野渉	14.93%	田村ゆかり	11.09%	福山潤	20.67%
3	豊崎愛生	10.77%	田村ゆかり	12.86%	小松未可子	10.15%	三森すずこ	11.19%	小倉唯	9.98%	井口裕香	9.86%
4	今井麻美	7.0%	上坂すみれ	12.86%	佐倉綾音	7.25%	津田美波	9.7%	高垣彩陽	8.13%	下野紘	9.54%
5	堀江由衣	6.49%	戸松遥	8.58%	佐藤拓也	5.8%	茅原実里	7.46%	水樹奈々	7.21%	豊崎愛生	7.55%

表 1: 2013 年 1 月〜6 月 個人出現率上位 5 名

		218.1p		
1	竹達彩奈	7.57%	アイムエンタープライズ	15.4%
2	井口裕香	5.55%	ミュージックレイン	12.59%
3	水樹奈々	5.48%	アセンブルハート	7.57%
4	田村ゆかり	5.04%	大沢事務所	6.69%
5	上坂すみれ	5.04%	スペースクラフト・エンタテイメント	5.62%
6	悠木碧	4.47%	プロ・フィット	5.53%
7	小倉唯	4.13%	シグマセブン	5.48%
8	梶裕貴	3.90%	スタイルキューブ	5.16%
9	豊崎愛生	3.74%	アーツビジョン	5.07%
10	戸松遥	3.67%	青二プロダクション	4.93%
11	日笠陽子	3.36%	アクセルワン	3.74%
12	高垣彩陽	3.21%	81 プロデュース	3.61%
13	福山潤	3.09%	APD/リンクアーツ	2.18%
14	下野紘	2.75%	VIMS	1.95%
15	羽田野渉	2.52%	響	1.87%
16	内田真礼	2.44%	劇団ひまわり	1.62%
17	茅原実里	2.18%	ヒラタオフィス	1.61%
18	堀江由衣	1.95%	EARLY WING	1.39%
19	津田美波	1.95%	賢プロダクション	0.97%
20	三森すずこ	1.72%	マウスプロモーション	0.69%

表 2: 2013 年上半期個人及び事務所別出現率上位 20 名

4.4 データ考察

昨年辺りから竹達彩奈の割合が非常に多くなってきた感がある。しかしながら田村ゆかり、水樹奈々のトップ 2 は相変わらず不動の地位と言えるだろう。
意外にもスフィアの 4 人が上位にランキングされていないという事実がデータから読み取れる。これは本データが複数人で掲載されている場合についてはその人数にて除算するという定義により個々の掲載割合については少ない割合になってしまうからである。しかしながらほぼ毎月 4 人同時の特集が掲載されている。これは事務所別のデータを見れば読み取れる事実であり、
現にミュージックレインによる掲載率が相変わらずの上位にランクインしている。
ミュージックレイン所属で掲載されている声優はスフィアの 4 人以外に心当たりが無いのでグループとしてセット販売感が相変わらず窺える。

声優セット販売グループと言えばスタイルキューブの StylipS がある。そのスタイルキューブが事務所別にランキングしているがこれは StylipS によるものでなく主に小倉唯によるものである。

全体を通して言える事は統計をとり始めた 6 年前から世代交代が起こってきていると思われる。次回はこのあたりに注目したデータ収集を行ってみたいと考えている。

参考文献

（株）主婦の友社発行 月刊声優グランプリ 2013 年 1 月号〜2013 年 6 月号

連載記事

5　声優システム論（10）

声優ユニット考 (2）-petit milady と Stylips と-

TCVV 議長

声優システム論とは

現代声優はアニメや洋画に声を当てるだけの存在ではなく社会や経済にも影響を与える存在になり、その動きは一昔前の古典的な声優観では説明出来無い。
そこで現代声優の振舞いを複雑系として捉えることを考え、この系を『声優システム』と名付けた。[7]
本論は『声優システム』を様々な角度から考察するものである。

1. まくら

竹達彩奈、悠木碧のユニット『petit milady』。
結成前後の時分は話題となったが、現状あまり話題となっていない。
本格的に活動を始めて 3ヶ月程度ということ、更にお子様向アニメの主題歌しか唱っておらず、またこれと言ったイベントもやっていない点が要因だと考える。
お子様向けアニメの主題歌は petit milady の歌を聞かせておいて今から英才教育をしておくという長期戦略か。まぁ、このユニットがそんなに長く続くとは思えないけれど。
いずれにせよ、今のところヲタを引き寄せる力としては弱い。
人気声優であったとしても食傷気味になっているかも知れない。
爆発的に人気が出るのか知名度を生かし切れずに不発に終わるのか注視している。

2. 声優ユニットの目的

Wikipedia にて『声優ユニット』という項目を参照すると新旧および解散したものまで実に多く掲載されており、こんなにも存在したのかと驚く。
昨今、声優ユニットが乱立しているように感じてはいたが現在商用ベースとなっているのは女性声優に限って言えば 3〜4 グループ程度だと考える。意外と少ない。
前回の話と被るが結成経緯からの分類をすると声優自身が勝手連的に作るものと事務所主体で結成されるものに分れる。
そもそも声優ユニットを作る理由は何か。
勝手連的に出来るものは声優自身に何か目的[8]があって結成される。(演劇サークル的なものや音楽サークル的なものなど)

[7] システムたる典型的な例は声優のためにアニメが作られるようになったこと。主従で言えば、従だった声優が主になったという点から見ても『システム』要件を満している。
[8] *Aice*[5] の場合は堀江由衣が先行していた Drops を見てユニット作りたいという目的と手段が微妙に入れ変っていたが...

それら勝手連的なグループについては作品に影響を及ぼさない限り自由にやって頂いて結構だ。
ただし、$Aice^5$ は例外だったと考える。堀江由衣が勝手連的に結成したが、それが商用ベースに発展してしまい、更には作品に**悪影響を与えてしまった**。作品に影響を与えてしまっては駄目だ。勝手連的ユニットが完全に無害かと言えば、そう言うこともない例として覚えておいた方が良いだろう。

問題は事務所主体の方だ。事務所は慈善団体ではないのだから所属しているタレントを売り出したい。そのためにユニットを結成するので商用ベースの話となる。
そうなるとタイアップという名のゴリ押しキャストが出てきてたちまち作品に影響を与えてしまう。(第一の問題)

3. 事務所主体のユニットの厭なところ

第一の問題で上げたゴリ押しキャスト。キャストの入れ替えが発生したり原作改変が少なからず発生する。
第二の問題は事務所主体のユニットを見ていると『やらされている感』が出まくりなものがある。勝手連的に結成されるものは声優自身の目的意識が強いので、そんなことは皆無に等しいが、事務所主体であると仕事だから仕方ないと義務感でやっているように見えて、大変痛いたしい。
本意ではない声優のアイドル活動については桑島法子や福圓美里も語っていたが、本当に一部の利権関係者以外は得をしないと思う。

4. 再処理工場『スタイルキューブ』

昨今、声優界にアイドル (崩れ) から流入してくる事例が多い。既に目的からして違うから腹が立つ。
特にスタイルキューブはその色が濃い。スタイル・キューブのやり方を単純化するとこうだ。
通常のアイドルとしては大成しなかったアイドル崩れを『声優バイアス』を用いて再処理してアイドル声優に加工する。今度は、その声優とアイドル崩れを一緒にしてユニット結成させる。(声優プルサーマル)

一人一人を育てるという雰囲気を全く感じない。くっつけるところから始まる。社長が一般芸能事務所上りなので従来のアイドルと同じ手法を持って来てしまっている感がする。
社長のブログを見ると声優やアニメ業界には高い壁があって何とか崩しにかかっている感じがあるが、所詮は従来の芸能事務所的な手法に留まっているのが現状だ。
LIPS ほどのやっつけ感は無いものの結局はプルサーマルをやっているに過ぎない。

多くの人が Stylips に抱く違和感は声優の仕事なんかしていないのに『声優ユニット』と名乗ることだろう。
スタイルキューブはアイドル色の高い Stylisp の方ばかりが目立って、声優色の濃い三澤紗千香は蚊帳の外に置かれているようにしか見えない。社長はファンの行動や構造を全く理解していない。
スタイルキューブのやり方は倒産したラムズにも劣る。

5. 新生 Stylips

4 月 27 日、Stylips は石原夏織・小倉唯が抜けて豊田萌絵、伊藤美来が新たに加入した。
が、新しいメンバーの顔ぶれを見て誰？と思った人が殆どだろう。
看板は同じで中身を入れ替るというのは『モーニング娘。』方式そのまま。流石、ハロプロの流れを汲むスタイルキューブと言ったところか。
下馬評では三澤紗千香が入るのは無いかとの噂もあったが、当方自身、それはないとは思っていた。彼女はアイドルには向かないからだ。(そんな彼女が何故、スタイルキューブに所属しているのかは非常に不思議ではあるが)

ただでさえ知名度という点で遅れを取っていたのに更に不利になってしまったという感がある。本論で再三に亘り声優ユニットが成功する要件の一つに知名度があると考えている。メンバの過半数に一定の知名度がないと概ね、そのユニットは解散の憂き目に遭っている。逆にスフィアが成功したのは構成メンバー各個人の知名度の大きさに他ならないと考えている。ただし、知名度は必要条件ではあっても十分条件ではない。まくらでも述べたが事実、『petit milady』は今のところ、盛り上がりに欠ける。

Stylips は『アイドル声優』というより『声優アイドル』に近い。声優みたいなことをしているアイドルと言うのが適切だろう。ただのアイドルグループ以外に何者でもない。声優だと認識しているのは皆無ではないかと。

メンバが変わる前から存在自体が謎だらけであったがメンバが変わってから更に意味不明な団体になっている。一言で言えば方向性が全く見えないのだ。声優ユニットと言いいながら実際にやっているのは能登ぐらい。それも申し訳程度。
元々がアイドル系事務所なので、そう言う方向性なのかも知れない。事実、「ゆいかおり」もメジャーになる前は頻繁に水着写真など声優活動としては斜め上な活動をしていた。

兎に角、声優と名乗るは、まずまともに声優活動してからにして欲しい。
そんなことだからホリエモン程度の人間に馬鹿にされるのだ。

6. 提案

アイドル系事務所がアニメコンテンツ系ビジネスにユニットとして参入したければ、モモクロのように所属している会社の作品の OP/ED のために働くスタイルを取るのがよっぽど潔い。
Stylips は作品に出ることなく OP/ED だけ担当する純粋なアニメタレントとして活動すれば問題は全てクリアする。
歌唱力やダンスは抜群なのだから長期的な支持は得られるだろう。
我々としても作品が侵される心配はないし支持もできる。
とてもとても WIN-WIN な関係だと思うのだ。

7. 今回のまとめ。

- 現在、商用ベースの声優ユニットは 4 グループ程度で意外と少ない。
- スタイルキューブのやり方はラムズにも劣る。
- Stylips は声優ではなく純粋にアニメタレントとして活動すべき。
- $Aice^5$ は例外中の例外。色々な意味で...

6　TCVV フォーラム

TCVV 会員や読者の声を放談という形でお届けします。

TCVV 事務局

本誌に関する御意見、御感想をお待ちしています。
info@tcvv.org もしくは公式ページの意見箱までお寄せ下さい。

6.1　Chairman's free talk-議長放談

I. ラムズ、駄目でした。
前回、野川さくらの出演が久々にあったので暫くは大丈夫ではないかとコメントしましたが、その3ヶ月後に倒産してしまいました。びっくりです。

II.『彼女がフラグを折られたら』
キャストに日笠、茅野、花澤、阿澄。
TCVV 短観で上位を占めている人達がキャスティングされています。
人気声優をふんだんに使う物量作戦。どんな作品になるのか、私、気になります。

III. 棒が流行りなのか？
「あいうら」、「帰宅部活動報告」。
最近、棒声優をキャスティングするのが流行りなんでしょうか？
これが永井氏の言う『個性』ですか。私は見ていてイライラするだけですけど。

IV. アイドル声優の賞味期限
桑島法子が 2013 年 7 月 23 日の朝日新聞にてアイドル声優は旬を過ぎたら使ってもらえなくなるという発言をしました。空気を読まない、恐いの知らずな桑島らしい発言だと思いました。

V. AKB48 を脱退して声優になった人
そんな簡単に事務所に所属できるんですか？
それこそ、AKB バイアスとか声優バイアスなのでは？
前回の声優システム論でも述べましたが元 AKB の看板だけでは尖り方が非常に弱い。
スグに消えるのではないと予想しています。

VI. 今日のあすかショー
能登有沙、原紗友里がレギュラ出演している。この名前を聞いて。それぞれ不発ユニットの中の人かと思ったのは私だけではないでしょう。

VII. 三澤紗千香
ポテンシャルは低くない方だと思いますが出演数が伸びていません。
大学在学中で学業に専念するためというのなら良いのですがアイドル系事務所に所属しているのが原因だとしたらイヤですな。

6.2 From member's voice

情報管理部調査課主任　北沢紘一

AK なんちゃらの総選挙?何それ??ヴァカなの???などと嘲笑っていましたがラブライブにすっかりハマってしまい推しメンは星空凛ちゃん、総選挙も全力で応援しました hi
ライブは諸般の事情により現地へ行けませんでしたがライブビューイングが地元でありましたので行ってきました。
6 月の竹達彩奈バースデーイベントは運良くチケットが取れましたので行ってきました。夜の部を取ったので帰る事はできませんでしたので翌日月曜日はもちろん有休取得です。
えっ?サークルの主旨に反する??いや行ったのは偵察目的であって決してサークル主旨を忘れている訳ではありません　（汗）
　さてここしばらく声優業界も世代交代といいますか、確実にトレンドが変化してきている様に思えます。
今までのベテラン勢は相変わらず安定していますが、自分と同世代から少し下の世代が確実にその波が見えると感じている次第です。
実際アニメを見ていても数年前まで「またコイツか....」と聞いていた声がさっぱり聞こえなくなったり、本誌掲載の専門誌におけるグラビア掲載率を見ても確実に世代というよりトレンドが変わってきている事が読み取れます。
まぁ実際、我々声豚にとっては新しい声が聞ける事は非常に喜ばしい事なのですが、それに比例して『明らかに棒だろ?』という事が増えてきています。
棒声優の代表格として茅原実里があげられますが彼女の場合アーチストとしての地位がある訳ですしそっちで何とかするでしょう。
　アーチストといえばそういう売り込みを得意としていたラムズがついに倒産しました。当サークルでも一時親の仇のごとく取り上げていた事もあり、永遠のライバルを不慮の事故で亡くした主人公のごとく寂しい気持ちです。
最後まで残っていた野川さくら、宮崎羽衣は今後どうなるんでしょう。宮崎羽衣は本年 1 月クールで久しぶりのレギュラーで声を聞きました。野川さくらも今期ローゼンメイデンで久しぶりに復活と思いきや新作での採用はゼロでしょう。
ずっとフリーでしたがつい先日事務所所属になりましたね。まぁど〜でもいいんですけど...
そのお歳でアイドル声優できるのは王国の姫（17 さい）だけですよ。　（笑）

6.3 From reader's voice-読者の声-

岩田晃紀

いささか真面目なこの白書に、某 K 氏に迂闊な時期に電話をかけて、迂闊に紙面を割かれて 1 ページ自由に書く羽目になりました。

今期のアニメは恋愛ラボで真木夏緒役で赤崎千夏から折部やすなっぽさがなくなって、ちゃんとお嬢様をしている辺り、やっぱり声優だという安心と一抹の寂しさを感じました。きんいろモザイクでは、いよいよバイリンガルで演じられる声優さんが出てきて、これからの原作対象の広がりが期待できそうです。外国語に関する国内向け放送禁止用語は無いに等しいのでやりたい放題で出来ますね。凄いの作って海外の只見の連中に「当局の規制で見れねえ！」と言わせてやりましょう。

久しぶりにやらかした宮崎アニメは、庵野監督を声優に引張ってきたり、「効果音は全部声で」とのたまってスタッフを青くさせたりと、手法と演出がかみ合わない風ではありますが、おもしろそうです。雑草ノートを 15 分アニメにしてやってみたら良いと思います。

とても残念だったのは、二人はミルキーホームズの前枠です。4 人も出て「わー。凄い」だしなあ。やっぱり、声で仕事しろよと。

さて、いきなり、TCVV の提言はともかくとして、小林幸子と大山のぶよが一緒に歌ったり、コンビニのアルバイトがレジ打ちと品出しから、公共利用料金の支払いの受付、住民票の交付代行までする世の中とあって、一般に目の届く範囲で声一本で貫くには難しいように思います。
特に『メディアミックス！』とか鼻息の粗い作品だと避けようが無いですし。
そこは実力、容姿を兼ねた二物を得る者が担当すれば良いわけですが、実力一本の人も気の持ちようだと思います。
かつて、昭和歌謡の時代に小椋佳がイメージ先行させすぎてレコードデビュー後同じようなケースにあったようで
母曰く
「声が良いでしょ。レコードのジャケットも好青年が描かれててどんな人か期待はしてた。」
「テレビで見たら期待はずれだったけど悪くはなかった。」
と、歌声が必要であって顔はそれほど重要ではない要因のようです。
（男の場合、ちょっと良いジャケットとサングラスで大分補正は出来ますが）

表現力や演技力については、ディズニーの様に声優（俳優）から表情をトレースして動画に起こす方式に比べると日本のような画に声を嵌める式では要求される力量が違うので、優先順位が上がりにくい所ですが声優本人の研究やトレーニングには期待したいところです。

結局、落ちぶれぬ様、もしくは成長していくのを見たいと願ってる白書には違いないので田村ゆかりの様に来る役が大体少女役みたいな、むろみさん役が無ければ大体平均 17 歳（どっかのまとめブログで見たけど失念）みたいな、こいつ凄いと言えるような声優が心置きなく活躍できる市場になればなあと思います。

ところで、野村総研が、『こいつは、中々金払いの良い市場だぜ！』と、レポート上げて, ずいぶん久しいですが、アニメ制作や、オタク向けのコンテンツにおいてオタク向けのファンドが出ないのは、出資者のオーダーがめんどくさそうだから？
キルミーの 2 期を是非, 野村ファンドで。

編集後記

本誌をご高覧頂きありがとうございます。
前回、声優島に復帰したと思ったら今回の配置は声優島の端に飛ばされてしまいました。
我々は評論の積もりなのですが、どうも配置担当者には圧力団体と見られているようです。
それでも声優島にいる分だけマシと言ったところでしょうか。

昨年来から日本で話題 (？) となっている安倍内閣の景気浮上施策の『アベノミクス』。
景気が浮上すればヲタ様の財布の紐が緩んでアニメコンテンツ需要が多少上ってくるのではと考えいる人もいるかと思います。
アニメ放送本数は 2006 年をピークに減少傾向ですが、それでも 2004 年水準は維持しています。
2004 年と言えば歴代最長と言われながら実感の無かった『いざなみ景気』のど真ん中であったことから景気回復しても、大してヲタ様の財布の紐は緩まないのではないかと思います。なので声優需要もさほど上らないのではと考えています。残念ながら。
少ないパイの争奪戦も暫く続くのではないかと思います。

ラムズ倒産には驚きました。不景気の煽りを受けて拡大路線に行き詰ったのでしょう。
所属している野川さくら、宮崎羽衣の出演数が激減していたんでヤヴァイと本誌面でも言っていましたが本当に無くなってしまうとは思いませんでした。
あっ、どうでも良いですけどラムズは新宿事務所以外にサテライトオフィスがあったんですよ。

桑島法子がアイドル声優の賞味期限について新聞紙面にて語っていました。
全くその通りだと思います。
本誌の古参の読者であれば、かつて本誌では『アニタレ』という言葉が頻繁に使われていたのを御存知だと思う。アニタレとはアニメタレントの略称で一見声優に見えているが声優と言うよりメディアへの露出が多くアニメ周辺事業を行っているタレントです。
Stylips とか上坂すみれは声優と言われると違和感を感じるんです。これほど『アニメタレント』という言葉がしっくり来るものはいないと思うのです。
TCVV 短観を見てみると新人声優が続々と上位に上って来ています。中には既にアイドルっぽい扱いをされて来ている人がいますが桑島先輩の言葉を考えて欲しいと思います。
それでも事務所がやれと言ったらやるしかないんでしょうけど。断わると干されるという陰湿な事務所もありますしので正直非常に困ったものです。

ホリエモン発言については声優関係者は反論するだけではなく、その発言の意味を重く受け止めて欲しいと思います。スキルが要らないと思わせた原因について考えて欲しいものです。
平均化や没個性化は何も声優だけではなく現在の日本企業が陥っている現象そのままです。
本質を失なわせず且つ斬新な方法を見付けるのは至難の業ですが、これをしないと先は無いと思います。

前号でお知らせしたように次号を持って本誌の発刊を中断します。
サークル活動そのものの中止する訳ではなく活動について一旦見直しをしたく思います。
残り 1 号となってしまいしたが次回もよろしくお願いします。

2013 年 8 月 5 日 TCVV 議長 萱沼真一

TCVV 白書 第 16 号 通巻 19 号
発行 「声優は Visual に出るな!会議」情報管理部
組版 LaTeX2e (FreeBSD)
発行日
2013 年 8 月 10 日（初版）
連絡先
「声優は Visual に出るな!会議」
代表者　萱沼真一
URI http://www.tcvv.org/
E-mail info@tcvv.org
Twitter http://twitter.com/tcvv
Copyright (C) 2013 The council of 'Voice actors should not appear in Visual'
本文に一切変更を加えず、この著作権表示を残す限り、この文章全体のいかなる媒体における
複製および配布も許可する。